

平成20年度エゾシカ保護管理検討会開催結果（要旨）

平成20年5月16日（金）9:15～12:00

かでの2・7 8階 820 研修室

○議題1 「平成20年度北海道東部地域個体数指数について」

検討結果

事務局及び山村委員より資料説明後、意見・質問を受け、指数検討部会の検討結果を基にした事務局提案の指数  $125 \pm 20$  が了承された。

○議題2 「平成20年度エゾシカ個体数管理方針について」

検討結果

A 地域)

10月25日(土)～3月1日(日)

稀少猛禽類の繁殖に特に配慮を要する地域については、広めに地域を指定して猟期を短縮する。斜里町及び羅臼町での「輪採制」試験については、昨年の課題を可能な限り改善して継続する。

B 地域)

10月25日(土)～3月1日(日)

C 地域)

10月25日(土)～11月24日(月) 12月13日(土)～1月18日(日) 1月31日(土)～3月1日(日)

許可捕獲についても狩猟カレンダーの提出

西興部村)

9月15日(月)～3月1日(日)

主な意見

<南部の中断期間設定について>

- ・南部の中でも特にシカの増加が懸念される地域に限ってでも捕獲努力量を、今のうちに上げておかないと、他の地域の二の舞になる可能性がある。
- ・可猟期間をできるだけ長くにとって捕獲数を増やすことを期待すべきである。
- ・南部の中抜き論の論点は二つで、函館周辺はエゾシカの生息適地がいくつも見られるところであり、爆発的増加の危険性は常に持っていることから、できるだけ可猟期間を長くして捕獲数を増やしたいという意見と、中抜きの効果のデータをもう少し集積したいという意見に集約される。
- ・捕獲圧を継続してかけ続けるということは、実は、そのうち効果がなくなっていく恐れがあるので、そうではない方法を試験すべき。捕獲圧の継続による捕獲数の確保が東部地域で成功しているのならいいが、
- ・今、中抜きをやめてしまうと、今までの試験が無駄になるので、捕獲努力量の低下を最小限にしながら、中抜きの効果を検証していく方が建設的な考えである。
- ・効果はまだ検証されていないけれども、猟期を長く設定すると低下する捕獲効率が、中断期間を設けることによって復帰できることを地元で説明しながら進めて欲しい。

<東部の可猟期間について>

- ・昨年度の検討会での検討結果では、根室～標津の猟期を2月3日で終えるという話にはなっていなかったはず。稀少猛禽類保護の観点からすると、2月3日で終える必要性のない町村も含まれている。
- ・東部一部市町村で狩猟期間を短くする最大の理由は、稀少猛禽類の保護なので、その理由がないところに関しては、最大限、猟期の延長について説得してもらうことが望ましい。
- ・根室支庁管内の輪採制以外のところは2月末まであける案を出して、その後、意見調整すべき。
- ・東部地域は（輪採制地域を除いて）一律に猟の終期を3月1日とし、稀少猛禽類の繁殖に特に配慮すべき場所を研究者の意見をききながら広めに設定するのが望ましい。

#### <輪採制試験について>

- ・ 羅臼町に関しては、実質的にB地区が閉まっていたら、流し猟しかできない期間は羅臼町全体が狩猟のできない状態だったため狩猟努力のしようがない状態が生まれて、狩猟者から非常に不評だった。捕獲数は昨年度に比べて増加したが、輪採制によってたくさんとれるようになったという認識は狩猟者には全くない。H19と同内容では地元の狩猟者の合意は明らかに得られない。地元狩猟者の強い要望としては、B地区内のエゾシカ捕獲禁止区域で期間限定でも可猟とすること。保護林の林道は12月中旬で積雪のため車両が進入できなくなるので、12月中旬まであいていれば、十分である。
- ・ 斜里町に関しては、一般の狩猟者が立ち入れない私有地の問題や輪採制のためシカがいても捕獲のできない農地があったなど、課題もあったが、大筋で地元の理解は得られた。
- ・ 輪採制は継続するが、具体的な設定内容については、地域固有の問題があるので、あとは関係機関と十分調整を進めた上で、設定することとする。
- ・ 稀少猛禽類研究者もエゾシカの問題は認識しているが、個体数管理を銃猟に頼る方法はうまくいかないというのが意見。
- ・ 輪採制は知床半島エゾシカ保護管理計画との整合性についても今後詰める必要がある。
- ・ 輪採制における羅臼町の面積の狭さの問題を解決する一つの方法として、調整が可能であれば隣接する標津町も含めた実施について検討することとする。

#### <その他>

- ・ ユニット10（阿寒・白糠）での捕獲が、その周辺のユニット4などにどのように影響しているかを解析することは意義がある。
- ・ 2月解禁の効果を評価するうえでは、積雪量を考慮して分析することが必要。
- ・ 異常な少雪にもかかわらず、意外と捕獲数があった要因の解析は重要。
- ・ データがある程度確保できているユニットについては、捕獲の結果、指数の変化がどうなったということ解析する価値は非常に高い。
- ・ シカ猟解禁日（10月25日）の前倒しの可能性について今年度は無理でも今後検討が必要。安全性への配慮が必要なのであれば、例えば解禁当初は散弾銃による狩猟に限定するとか、猟法によって区別することを検討すべき。
- ・ メスジカの捕獲数を増やすために、時期を限定したオスジカの捕獲制限を行うことも検討すべき。